

籠太鼓

世阿弥作

ワキ 松浦何某

ヲカシ 牢番

シテ 関清次の妻

地は 肥前

季は 雑

ワキ詞

「是は九州松浦の何某にて候。さても某召しつかひ候ふ関の清次と申す者。他郷の者と口論し。念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事にて候ふ間。やがて籠者させて候。彼者大剛のものにて候ふ間。番の事かたく申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。」

ヲカシ

「御前に候。」

ワキ

「彼者大剛の者にてある間。番の事かたく仕り候へ。」

ヲカシ

「畏つて候。」

ヲカシ

「いかに申し上げ候。清次が今夜籠を破りぬけて候。」

ワキ

「何と清次が籠よりぬけたると申すか。言語道断の事。さてこそ最前より堅く申し付けてあるに。さやうに油断仕りであるぞ。さて彼者の子はなきか。」

ヲカシ

「いや子はなく候。」

ワキ

「妻はなきか。」

ヲカシ

「それは御座候。」

ワキ「さあらば急いで其女をつれて来り候へ。

ヲカシ「畏つて候。

シテ詞「科人を召しこめられ候ふ上は。女までの御罪科はあまりに御情なうこそ候へ。

ワキ「いかに女。さても汝が夫の清次。今夜籠を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ。まつすぐに申し候へ。

シテ「もとより賤しき者なれば。我身の助かり候ふをこそ喜び候ふべけれ。わらはにはかくとも申さず候ふほどに。夢にも知らず候。

ワキ「いや／＼何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづ／＼落居の有らんほど。夫の代りに籠者させ。其有所をたゞさんと。

地「いまの女を引き立て／＼。／＼。いそぎ籠者になすべしと。さも荒けなき人心。情なしとは思へども。殺害の科をのがれえぬ。報いのほどぞ無慙なる。

く。

ワキ詞 「やあいかには汝は女に向ひ何事を致すぞ。其のさげなるによつて清次をも籠より逃いてあるぞ。所詮いまよりは鼓をかけて。一時づゝ時を打つて番を仕り候へ。

シテサシ 「げにや思ひ内にあれば。色は外にぞ見えつらん。包めども袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙かな。

ヲカシ 「いや言語道断。籠中の女が狂氣になりて候。やがて此よしを申さうずるにて候。いかに申し上げ候。

籠中の女は以ての外狂氣仕り候。

ワキ 「是は誠にてあるか。

ヲカシ 「さん候。

ワキ 「あら不便や立ちこえ見うずるにて候。やあいかにな。何故さやうに狂氣してあるぞ。

シテ 「何故狂氣するぞと承る。

カル「人の心の花ならば。風の狂ずる故もあるべし。況んや偕老同穴と。ちぎりし夫もゆくへ知らで。のこる身までも道せばき。なほ安からぬ籠の内。思ひの闇のせんかたなさに。物に狂ふは僻事か。

ワキ「げに／＼夫の別れ籠者の思ひ。一方ならぬ身のなげきに。物に狂ふはことわりなり。さりながらいづくに夫の有処を。知らせばやがて呼びとつて。汝は籠より出だすべし真直に申し候へ。

シテ「是は仰せとも覚えぬものかな。たとひ夫の有所を知りたればとて。あらはし夫を失ふべきか。其上夫のありどころを。夢うつゝにも知らぬものを。

ワキ「やさしき女の言事やと。手づから籠の戸をひらき。はや是までぞとく出でよ。

シテ「御心ざしはありがたけれども。夫に代れる此身なれば。此籠の内をば出づまじや。

カル「是こそ形見よなつかしや。

地

「無慙やわが夫の。身に代りたる籠の内。出づまじや雨の夜の。つきぬ名残ぞかなしき。西楼に月落ちて。花の間も添ひはてぬ。契りぞ薄き灯の。残りてこがるゝ。影はづかしきわが身かな。

ワキ詞

「言語道断。かゝるやさしき事こそ候はね。此うへは夫婦ともに助くるぞとく出で候へ。

シテ

「かほどに情ましまさば。始めよりかく憂き目を見せ給ふべきか。

カゝル

「さるにても我夫はいづくにあるやらん。なふ心が乱れさむらふぞや。

一声

「みだるゝは。柳の髪か春雨の。

地

「涙にむせぶ心かな。

シテ詞

「なふくこれなる鼓は何の為に懸けられて候ふぞ。

ワキ

「あれこそ時守の時を知る相図の鼓よ。

シテ

「おもしろく。異国にもさるためしあり。かや

うに鼓をかけて時を守りしこともあり。其心を得て古き歌に。時守の打ちます鼓声きけば。時にはなりぬ君はおそくて。

地 「おそくも君が来んまでぞ。

シテ詞 「なふ此鼓を打つて心がなぐさみたう候。

ワキ 「やすき間の事いかやうにも打つてなぐさめ候へ。

シテ 「鼓の声も音にたてゝ。

地 「なく鶯の青葉の竹。

シテ 「湘浦の浦や娥皇女英。

地 「諫鞍苔むす此つゞみ。

シテ 「うつゝもなやなつかしや。

地 「鼓の声も時ふりて。く。日も西山に傾けば。夜の空も近づく。六つの鼓打たうよ。五つの鼓はいつはりの。ちぎりあだなる妻琴の。引き離れいくにか。わが如く忍音の。やはらく打たうよや。やはらく打たうよ。四つの鼓は世の中に。く。

恋といふ事も恨みといふ事も。 なき習ひならば。
独ものは思はじ。

シテ「九つの。」

地「九つの。 夜半にもなりたりや。 あら恋しわが夫の。
面影に立ちたり。 うれしやせめてげに。 身がはりに
立ちてこそは。 二世のかひもあるべけれ。 此籠
いづる事あらじ。 なつかしの此籠や。 あらなつか
しの此籠。」

ワキ詞「此上は諏訪八幡も御知見あれ。 夫婦ともに助くる
ぞはやとく出で候へ。」

シテ「げに此うへはさればとて。 御いつはりはやもあら
じ。 まことは夫のありどころ。 筑前の宰府に知る
人あれば。 そなたへ行きてや候ふらん。」

ワキ「いしくも隠さず申したり。 しかも今年はわが親の。
十三年に当りたれば。 科ありとても助舟の。」

シテ「松浦の川や西の海。」

ワキ 「彼国ちかき。

シテ 「極楽の。

地 「弥陀誓願のちかひかや。科を助くるあはれみの。

あらありがたの御慈悲や。

キリ 「やがて時日をうつさず。く。かくれし夫を尋ね

つゝ。もとの如くに帰りて。むすぶ契りのすゑ

久に。松浦の川や二世の縁。げにありがたき心か

な。く。